

話を聞いた人
齊藤 萌さん（観光チーム）

南島原市は田舎でのんびり。ふるさとの山形に近いですね。
来る前は、「大学生に何がわかるんだ」って怒られはしないかとヒヤヒヤしていました。
実際はどこに行っても「来てくれてありがとう」って感謝されて。照れくさかったですが、じーんとしました。

さとやま SATOYAMAラリーに参加しよう！

観光 チーム

SATOYAMAラリーって何？



SATOYAMAラリーは、簡単に言うとカメラを使ったスタンプラリー。スタンプではなく、携帯電話などで写真を撮りながら、自由に南島原の地域資源を見て回ります。チェックポイントごとに、点数を付加。点数に応じた特産品などがもらえるシステムです。

撮った写真が思い出になることはもちろん、基本的に器材が不要でコースも自在。行事のイベントの一つとして、また、常時参加できる観光プログラムとして実施が可能です。

「極端ですが、お客さんの顔を見ながら、その場でコースをコーディネート。ということも可能です」と話すのは、4回の訪問で、76カ所を巡り、100個以上の地域資源を見つけた齊藤さんら観光チーム。齊藤さんらは、南島原市



SATOYAMAラリーやってみた

2月12日、SATOYAMA ラリーinくちのつが行われました。商工会など関係者35人が参加。口之津富士山など36カ所を巡りました。当日はあいにくの雪模様でしたが、参加者は「これもよい思い出」とうれしそうでした。

を巡り、多くの魅力に驚いたそうです。「ですが、調べていくうちに、「観光客の滞在時間がとても短い。『これをなんとかしないと！』と考えたのがスタートでした」

現地でしか実感できない魅力を、体験できる「SATOYAMAラリー」を取り組みたい、という声が、早くも上がっているようです。

特集 Outsiders from 外なる者の Inside 内側からの提言



加津佐町岩戸山に登る学生ら（観光チーム）

南島原市の魅力発見と題して市内76カ所をめぐり、そのよさ、問題点などを探った。

初めてこの地を訪ねた若者が このまちを変えていく

「最初から、南島原市の存在を知っていましたが」という問いに、「正直知りませんでした」、「初めて…知りました」と照れながら答える若者たち。彼らは、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスの学生たちです。彼らは、県の産学連携の事業の一環として南島原市を訪れました。

南島原市を初めて訪れた「まったくの外部の人だった」彼らが、南島原市の内側に潜入。1年6カ月をかけて、市民と向き合い、南島原市の可能性を内側から探りました。

産学連携

産学連携、産学協同とは、これまでの「大学は学ぶところ」、「企業、地域は生産するところ」と分けて考えるのではなく、双方が連絡協力することで、理論と実地の結合を目指す考え方です。今回の事業は、長崎県の「地域の強みを活かした地域力向上支援事業」を利用。南島原市と慶應義塾大学が協定を締結し、大学側は、調査研究・提案を行い、南島原市は、事業の実施に向けて取り組んだものです。

テーマは3つ

南島原市で取り組んだテーマは「耕作放棄地の解消（農業チーム）」、「交流入口の拡大（観光チーム）」、「地域産品の販路拡大（産品チーム）」の3つ。いずれも難しい問題であり、関係者を

悩ませてきた事案です。

そんな中、提案いただいた内容は、どれも斬新で素晴らしいものばかり。今回の特集では、大学生らのきらめきに満ちた提案を紹介します。

現地の調査

学生が、初めて南島原市を訪れたのは、平成21年10月21日。学生らは、鯛釣り大会のイベントやイルカウォッチングなどを視察しました。農家宅や公民館に宿泊しながら、「南島原市とはどんなまちか」というテーマに對峙。全9回、延べ33日に及ぶ調査が始まりました。

響き合う、招く側も招かれる側も、

調査を受け入れる方も実は初めてですが、調査を受け入れた口之津町前

方自治会長の金子庄司さんは、緊張はなかった、と言います。「とても素直な若者ばかりでしたから。いい出逢いに感謝したいです」とうれしそう。生徒も「どこに行っても、優しくしてもらいました。本当にいいまちですね」と満足げでした。

「どうして、こんなに親切なのか、その理由をずっと考えてきました。」

田中一弘さん（産品チーム）は、ずっと疑問に思っていたそうです。そして田中さんが出した結論。それは、「移住」「船乗りの町」でした。

「移住を決断できる開拓精神のある祖先。彼らは、知らない人同士でも、『仲良くする知恵』が必要だったと思います。こうした歴史に加え、『船乗り』さんらの持ち帰る未知のお土産や情報、新しいものに対して積極的な風土を生んだのではないだろうか」

出逢いに感激する、市民と学生たち。お互いに刺激し合い、され合って、今回の提案はできていったのに違いありません。



訪問先での歓待ぶりに感動する齊藤さん(右)ら。写真左は、同じ観光チームのデナ・ガルブレスさん。